

観念論的世界観の物理主義的基礎

三浦俊彦 (Toshihiko Miura)

和洋女子大学

人物の同一性は、物理的トークンによって決まるのだろうか、意識内容のタイプによって定義されるのだろうか。どちらの定義の方が妥当であるかは、少なくとも一人称的人物については、実験で確認することができる。「量子自殺」という実験である。「私」が〈シュレーディンガーの猫〉の被験者であるとき、「私」が何度も実験を生き延びたとしたら、「私」は意識内容のタイプでなければならないことが帰結する。ただし、その前提として、何らかの多世界解釈が真であることが必要だ。

多世界解釈では、各人物の環境は、意識内容に含意されない領域が重ね合わせとなるため、主観的には非実在論的世界観が支持されることになる。しかし、「私の環境」が重ね合わせであるとは、正確には何を意味するのだろうか。物理主義的な解釈を探ると、「分岐」という用語が示唆するような〈同一時空における多重の物理環境の同居〉といった、物理的世界の本性に修正を迫る解釈よりも、〈遠隔の諸物理環境における同一意識の散在〉という、意識の物理的基盤の方に修正を求める解釈が浮上する。

つまり「私」の意識とは、特定の機能的系の集合論的構成物あるいはメレオロジカル・サムだ、という解釈である。この解釈により、心身二元論は物理的実在と普遍的実在の二元論へと統一されるか、または、物理的実在の一元論へと統合される。それによって、非決定論的な物理法則や、非実在論的な論理法則が可能である根拠について、物理主義的な解釈が提供される。

量子自殺は、多世界の中でどれが「私」であるかを定める基準が観測選択効果だけであることを実証しうる実験である。その実験結果から「多世界解釈」＋「意識の集合論的解釈」というステップをたどることにより、物理主義と観念論との無矛盾な統一が可能になる。通常の量子自殺は一人称的な実験にとどまるが、「量子心中」へと実験を拡張すれば、間主観的に、観念論的世界観の確認が為されうるだろう。

「多世界解釈の実験的検証」の一方法として提唱されることの多い量子自殺は、「自己同一性基準の実験的検証」としても解釈できるというのが、本発表の骨子である。量子自殺が実験として成立するための必要条件としてしばしば挙げられるのは、

- 1 死を引き起こす手段に量子効果が利用されていること
- 2 死（少なくとも意識の消滅）は即時に実現されねばならないこと
- 3 過去ではなく未来の出来事の決定に連動していること

等であるが、これらの条件の吟味から、多世界解釈の正否だけでなく自己同一性基準および意識の本性について、多くの洞察がもたらされることにも言及したい。条件2からは、意識の最小単位（刹那滅）、死と眠りの関係、無意識的主観の持続可能性が提起され、条件3からは、ニューカム問題の観念論的解釈が提起されうる。物理主義と整合的な非実在論的アイディアの源として、量子自殺の諸含意を論じる予定である。